



研究拠点紹介

歴史民俗資料学研究科

歴史民俗資料学研究科は、特定の学部を基礎に持たない、神奈川大学付置の日本常民文化研究所を基礎として1993年に開設された大学院である。本研究科は、日本で最初の資料学研究科であり、歴史研究や民俗研究の基礎には必ず資料が存在するが、その資料を適切に活用する技法を身につけ、資料を分析して日本社会を究明し、日本人ならびに日本社会の特質を再考する研究能力を高めることを研究科の大きな目的としている。

カリキュラムの特色

私たちの研究を深化させるには、一研究領域を越えた、諸学の協力のもとで行われる資料分析がきわめて有効であり、そのため、日本各時代にわたる文献史学や民俗学各分野の科目に加えて、文化人類学、考古学、保存科学、資料分析学など、幅広い科目をカリキュラムに組んでおり、それらを学ぶことで、文字資料、民俗資料、考古資料、図像、建造物など多様な資料を十分かつ総合的に活用できるようになることを目指している。

一方、高度経済成長期以降の大きな社会的変化に伴い、文字資料、非文字資料を問わず、さまざまな貴重な資料が消滅、ないしは散逸しつつあるが、そのような失われつつある資料を調査収集、整理分類、修復保存できる知識や技能を修得する人材の育成も指導目標としている。講義科目の中に文献史料整理・補修実習と民具資料整理・計測実習を設けて選択必修とし、実習科目を重視しているのもそのような理由からである。本研究科開設の趣旨には、資料・文化財の散逸に歯止めをかける意味でも、当面、文献史料、民俗資料の学問的な裏づけを持った実務に習熟し、各種文書館・資料館・博物館における実務を、指導的な立場に立って推進しうる優れた人材の養成も本研究科の目的の一つであることが盛り込まれている。

本研究科では、その趣旨をさらに推し進めるために、開設10周年を機にカリキュラムの大幅な改訂を行い、来年度からは、これまで文献史料学、民俗民具資料学の2つの研究分野であったのを、新たに博物館資料学の新分野を加えることとなった。それにより、博士前期課程では、博物館資料学特論、博物館歴史資料学特論、博物館民俗資料学特論、文書館資料学特論、博物館情報学特論、博物館展示学特論などといった科目が新設される。また、実習科目も従来の2つの科目が名称変更されるとともに、歴史史料調査実習、民俗民具資料調査実習、博物館実習が新設科目として設定されることになり、実習科目の一層の充実が図られる。さらに、世界に通用する院生を育成する目的で、英語・中国語・日本語（外国人留学生対象）の3カ国語について、ネイティブによる国際理解という選択必修の科目も新設される。博士後期課程においても、国際理解は3カ国語の隔年開講となるが、あとは博士前期課程に準じてカリキュラムの改訂がなされる。



実習風景

今後の展望

このような博物館資料学に関する科目の新設は、世界へ発信しうる研究拠点として、世界の資料保存機関の専門家と対等な立場で資料についての交渉や研究交流ができる院生、つまり、より高度な専門的知識を有する学芸員の養成という、

本COEプログラムで掲げている目的と合致するものである。本研究科では、修士論文は必ずしも特定の時代区分や民俗の領域内に限定せず、学際的、総合的なテーマの論文も提出されており、その研究動向は多彩多様であるが、今後、博物館資料学を専攻する院生の修士論文や博士論文が提出されるようになり、さらに研究内容に広がりを持つこととなる。

こうしたカリキュラムの大幅な改訂により、1993年の修士課程（定員10名）の開設以来、1995年、博士後期課程（定員3名、修士課程を博士前期課程とする）の開設、1996年、紀要『歴史民俗資料学研究』の発行、1999年、昼夜開講制の導入（博士前期課程の定員を20名に増員）、同年、最初の博士課程修了者に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与（これまで課程博士6名、論文博士1名が誕生）といった、いくつかの節目を経ながら10年の歴史を刻んできた本研究科は、発展期へと入っていくことになる。

（歴史民俗資料学研究科委員長 田上 繁）

研究拠点紹介

日本常民文化研究所

日本常民文化研究所の前身、アチック・ミュージアムは、澁澤敬三によって創設された在野の小さな研究組織である。ことに1935年頃から澁澤の死去する1962年までは民間の歴史、民俗の研究所として篤実な、また同時にそれでいてユニークな多くの業績をあげ多くの人材を輩出した。澁澤の人柄や発想や感性、使命感、そして組織力や財力に大きく依拠した活動を続けてきていただけに、彼の死後その活動は縮小し研究所の性格も変わった。一時は武蔵野美術大学の系列校である東京武蔵野市の武蔵野美術学園内にその場が移され、1972年には港区三田二の橋のマンションへと移った。この間、主に河岡武春、潮田鉄男によって研究所の業務が支えられていた。

この財団法人の研究所を神奈川大学が招聘したのは1982年のことであり、神奈川大学内の研究所としての活動はこの二十年余ということになる。

以下、本学に移ってきてからの活動を中心にいくつかのことを列記していきたい。

主な所蔵資料及び図書

本研究科は、旧研究所の蒐集した資料の一部を引き継ぎ、またその後の調査などで蒐集した資料を所蔵している。これらを整理したものから公開する。

水産関係筆写資料

二神家文書...古銭とともに同家より譲渡された。

寄託、寄贈文書...寄贈：永長家文書（茨城県）、小宮家（東京都）、小泉家（神奈川県）、西田家（東京都）ほか。

四季耕作子供遊戯図巻、耕稼春秋

絵引原画...1967年（1986年新版）に出版された『絵巻物による日本常民生活絵引』の村田泥牛による原画。

澁澤写真・澁澤フィルム...昭和初期に澁澤敬三が撮影させた各地の民俗等のスチール写真と18mmフィルム

図 書...旧常民から引き継いだ図書に、神奈川大学に移ってから寄贈、交換、購入等で受け入れた図書を加えた蔵書。

日本古代史研究者の故弥永貞三氏旧蔵書、民俗学者の故河岡武春氏旧蔵書、民族学振興会旧蔵書などを含む。

2003年10月現在で約8万冊。